

渋谷氏と相州刀工について 甘田一雄



1

本市が渋谷庄の中にあつたことは周知のことであり、渋谷氏とは密接な関係があるが、文書等の資料はほとんどない。私の興味は、市史資料の調査収集のかたわら、渋谷氏に武器の供給をしたと思われる刀工の所在を確認することであつた。

渋谷一族は、重国、重光の時代を最盛期としてその後衰退している。特に建保元年(1213)5月の和田合戦に一族のものが参戦して破れてから、その勢力範囲はかなり縮小した。そして宝治元年(1247)6月の三浦泰村の乱には、参戦していないようである。その後の記録は明確でないが、おそらく渋谷氏は細々と続いていたものと思われる。

早川城(綾瀬町)には重国の四男重助の裔石川氏があつて、後北条氏(小田原市)に仕えて「石川衆」と称している。そして、家康が関東へ入国したときの城主は、石川重久であつた。

このようにめまぐるしく変転する環境の中にあつては、渋谷一族も当然武器を備蓄することに努めたものと思われる。

鎌倉時代も末期に至り、特に文永、弘安両度の役を境として鍛刀にも変化が起り、その結果相州伝が発生したのである。今までの刀の弱点が、元軍との戦に際して暴露された。その原因は猪首(いくび)切先と樋先の上ること、そして平肉のつくことであつた(1)。これらの弱点を修正した華実兼備の相州伝が、時の武士の好みに合致し、大いにもてはやされたのである。

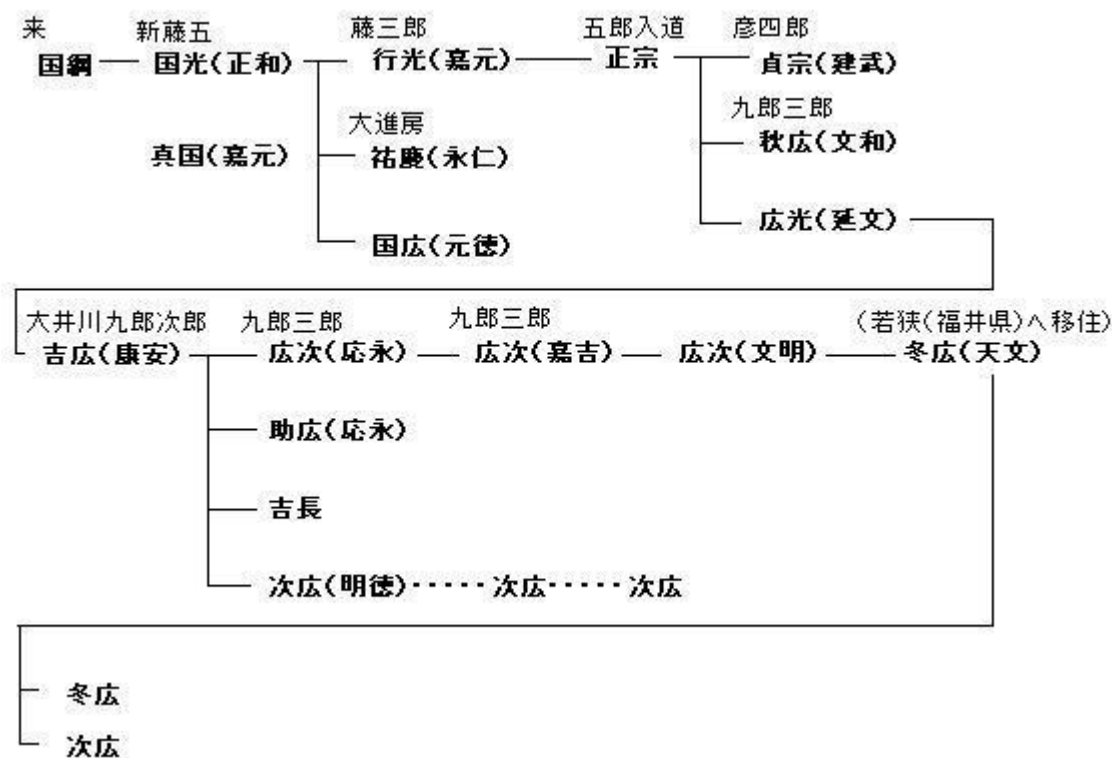
石井昌国先生の日本刀工住地調査対照目録(刀剣美術昭和49年4月号)によると、藤沢には吉広(明応)、次広(明応)、国次(永正)、周広(天文)の4人の刀工が確認されている。

2

鎌倉時代も中期に至り政権が北条氏に移ると、山城(京都)、備前(岡山)を中心に活躍していた刀工は、北条氏の招により一部鎌倉へ下り、相州刀工の祖となつた。備前

からは助真(一文字助房の子)が、長船からは国宗(真宗の三男)が、また山城からは国綱(来国家の六男)が鎌倉へ移住した。特にこの国綱の系統から相州伝という独特の流派が現出するのである。

吉広、次広もこの相州伝を受け継いだ刀工であり、特に次広は渋谷氏と密接な関係があったのではないかとと思われる。詳細は後述することにして、次広に至るまでの相州刀工の系図を追うと次のようになるであろう。



石井先生の著書「相州下原鍛冶の研究」によると、初代次広は吉広の門となり藤沢に住したことを伺い知ることができる。この次広は三代まで続いたようである。

藤沢市史第四巻では、『「相州藤沢住次広・明德元年十月日」銘の短刀を石井昌国氏が所持しており、この次広は藤沢住(渋谷庄)に代々住し、渋谷氏の鍛冶ではなからうか。しかし、その在地については、藤沢鍛冶と称する限り、もっと藤沢周辺近くに、その在地をもとめるべきではなからうか。』というようなことが記されている。しかし、当時の世相からみた場合、次広が武士や豪族の擁護なしに鍛刀していたとは考えられない。藤沢は鎌倉の玄関口に当たるため、戦乱による影響も大きかったものと思われる。住民は難を避けて山野に逃げ惑う生活が続いたことであろう。したがって、安定した

江戸時代のように城下町に定住し、武士や商人の注文を受けていたような刀工の生活は考えられない。やはり刀工も生活の安定があって初めて鍛刀に没頭できたものと思われる。

なかには備前や美濃の刀工群のように、居ながらにして注文を受け大量生産した集団もあるが、それでも時の権力者に依存する者も多かったのである。このような場合、たびたび戦争に従軍し、消滅していった刀工たちもいる。菊池槍で有名な肥後(熊本県)の延寿一派のように、菊池氏と運命を共にした刀工たちもいる。また、備前長船鍛冶の勝光・宗光のように赤松政則の特別の庇護を受け、一族を引き連れて戦争に加わったり、陣中で鍛刀した刀工もいる。

次広もやはり何らかの形で、特定者による庇護を受けていたものとみるのが自然であろう。そこで渋谷氏との関係が推定できるのである。それは、南北朝以降の藤沢はたびたび戦乱に遭遇しているが、渋谷庄はわりあい平穏であったこと、この間における資料に渋谷一族あるいは渋谷庄のことが触れてないことから推察できる。また藤沢市史でも指摘しているように、南北朝から室町にかけて、藤沢に特出した武士が生まれなかったということ等からも推察されるのである。

また、鍛刀地を「藤沢住」と銘に添えて刻したことは、一般的に知られている地名を使ったものと思われる。添え銘に「渋谷住」あるいは「渋谷庄住」とするよりは、「藤沢住」とするほうが知名度が高いこと、さらに地域的区分も明確でなかったことも考えられる。しかし、この点については、今のところ他に類似的な実例を調査していないため、あくまで推定であることを付け加えておく。

他に渋谷氏との関係を証明できる文献等はないが、その妥当性を否定するものもまたないのである。今後の調査によりあるいは具体化できるかもしれない。

3

次広の師とされる吉広は、大井川九郎次郎と称し、大和国(奈良県)千手院の鍛冶である。康安(1361)頃相模国へ移り、相州広光の弟子になったといわれる。この広光が何代であるかは明確でない。ただ山村家の家系によると、「九郎次郎広光 元享三癸亥五月十五日 法名 幽玄日覚」とあり、元享は1321年から1323年までである。この年月日を広光が死亡した日とすると、建武(1334~37)、延文(1356~60)、貞治(1362~67)裏銘(2)の作刀があるので矛盾する。

あるいは、この時期の作刀は二代作とも考えられるが、ほとんどの刀剣書籍は、初代の活躍期を延文、貞治としている。そして、永和2年(1376)2月裏銘の作刀を二代としている。したがって、初代の作刀とは区別して考えなければならない。

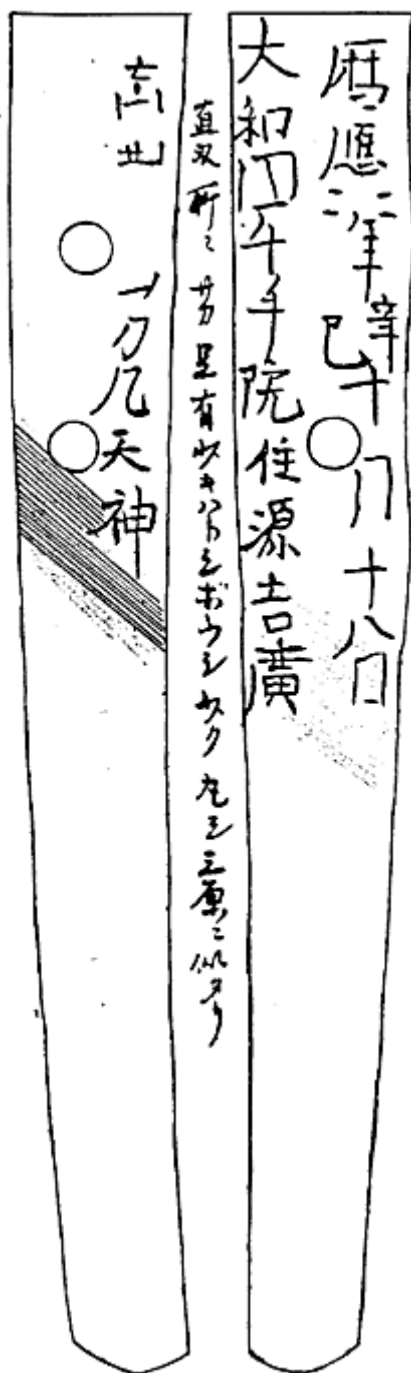
また、元享3癸亥5月15日を出生の日とすると、広光は38歳頃に吉広を弟子にしたことになり矛盾は解消するのである。しかし、家系には没年を記すのが一般的であり、年月日の下に法名があるので、没年と考えるのが妥当であろう。今後調査研究しなければならない課題である。

それでは、相州伝を代々引き継いだ山村家の家系を神奈川県大観から抜すいして紹介する。

正応	五郎入道正宗	戌子年正月十一日	法名	心竜日顯
元応	彦四郎貞宗	元応元巳未年三月十一日	法名	深淵日興
元享	九郎次郎広光	元享三癸亥五月十五日	法名	幽玄日覺
建武	九郎三郎秋広	建武二年七月廿一日	法名	沢水日供
貞治	九郎次郎正広	貞治六丁未九月廿五日	法名	觀達日妙
応永	九郎三郎広正	応永三丙子年十二月廿五日	法名	義厚日淨
享祿	綱 広	從小田原北条氏綱被召出山村対馬守綱広被成下		
		法名	蓮向	

天文	対馬綱広		法名	宗台
慶長	宗右衛門尉綱広	従家康公被召出	法名	玉祐
寛永	助右衛門尉綱広		法名	永珎
慶安	伊勢大掾綱広		法名	常縁
元禄	弥右衛門綱広		法名	觀成
享保	勘兵衛尉綱広			
寛延	宇兵衛尉綱広			
宝曆	山村宇兵衛	宝曆二申年六月九日	法名	宗觀
寛政	山村宇兵衛	寛政三年七月廿三日	法名	一中
享和	山村宇兵衛	享和元西七月廿九日	法名	法諦
天保	山村勘左衛門	天保元寅年十月十七日	法名	諦達
明治	山村宗三郎	明治十九年三月廿九日	法名	綱広
明治	山村繁之丞		法名	良善
明治	山村喜之助	明治三十八年十一月十二日		
		当代	福太郎	

また、吉広が大和国において作刀したと思われるものに、「大和国千手院住吉広・暦
 応二二年辛巳年十月十八日」と中心(なかご)に刻まれた鍛刀がある。暦応4年は13
 41年に当たる。その中心が「埋忠押型」(3)に所載されているので、次に紹介する。



押型

古雅なよい銘であり、中心の鑢(やすり)目は筋違となり、中心尻は浅い刃上がりの栗尻である。相模国に移る20年ほど前の作刀であり、作風も直刃を基調にした沸出来で、所々に逆足の入ったものであり、大和伝の特徴をよく表わしている。そして、相州伝本来の伝法とは別に、このような作風が弟子の次広に受け継がれているのではなかろうか。大和伝と相州伝の違いは中沸と荒沸という刃文の差異よりも、むしろ地鉄と地肌にあるが、この点について明確でないのが残念である。一般的に大和伝である千手院鍛冶の地肌は、小空目肌に柂目肌が交じり、鍛目がよく詰んで美しいものがある。相州伝は板目肌でやや肌立つものが多い。刃紋においても相州伝は稲妻、金筋、湯走り等の働きが豊富であるが、千手院はこれらの働きに乏しいものが多いようである。しかし、千手院のよくできた作刀は、相州伝上位の作に紛れるものがあるので、それほど類似点が多いといえるのかもしれない。

4

次広の作風については、石井先生所蔵の短刀二振りが対照的でおもしろい。まず、前述の明德元年裏銘の短刀は姿優しく、直刃調で通例の相州物と異なること。また、「相州藤沢住次広」明応裏銘の不動彫のある短刀(4)は、「一見秋広そのものの名作であるが、やはり時代は争えない」と石井先生は説明されている。実際に拝見していないので確実なことはわからないが、先生の説明から考察すると、前者の短刀は、大和伝の作風が影響しているのではあるまいか。もちろん相州鍛冶は全て相州伝で鍛刀したとはいえないが、少なくとも、相州伝による鍛刀でない

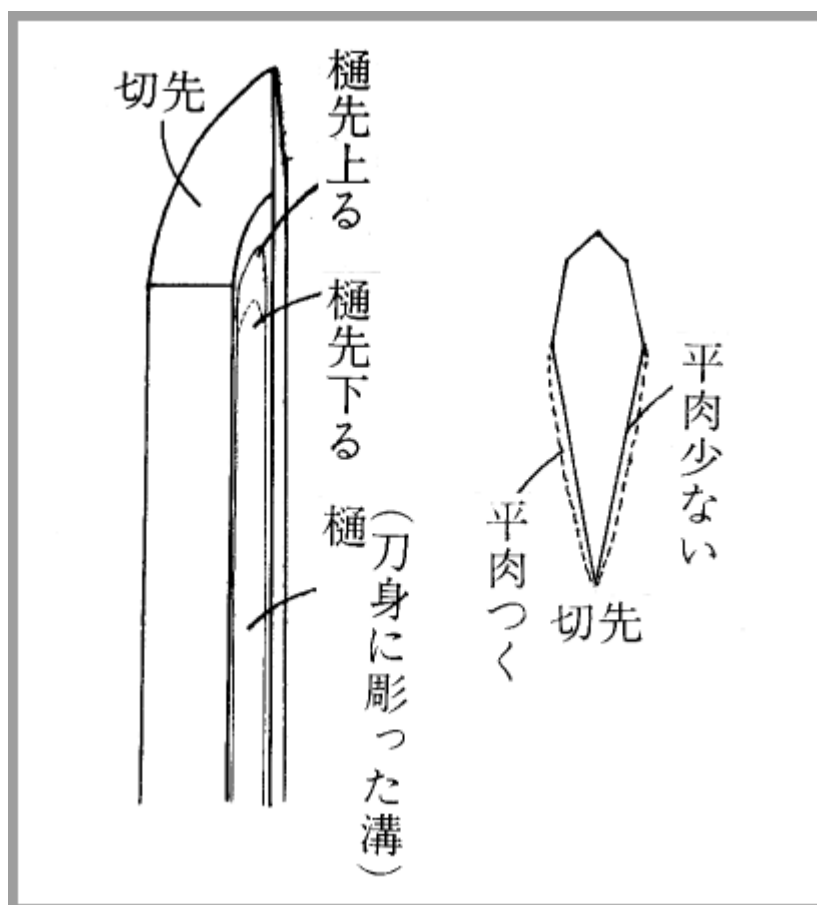
ことは確かである。そして後者の作風は、典型的な完成期の相州伝を表わしている。

もっとも、明徳から明応までは100年の開きがあるので、同一刀工の作とはいえない。明徳裏銘の作刀を初代とすると、明応裏銘のものは二代か三代の作刀と考えなければならない。おそらくこの二振りの短刀は銘振りが異なっているものと思う。

この次広が渋谷氏の鍛冶であったことを証明するものは、いまのところ皆無であるが、今後の調査によりあるいは立証することができるかもしれない。それは、渋谷氏の系統を引く家に次広の作刀が伝わっているか、あるいは次広との関係を証する文書等が発見されれば明確になるわけである。

現在のところ、乏しい資料により推定しただけであり、発表できる段階ではないが、読者からのご指導ご協力が得られればと思い、あえて執筆したわけである。

注(1)猪首切先とは切先が小さくずんぐりとしているので、猪の首に例えた呼称である。樋先の上ること及び平肉のつくことは次に図示する。



(2)裏銘は刀工の銘を彫った裏側に製作年月日や所持者名等を彫ったもの。

(3) 埋忠押型は慶長から承応年間まで埋忠家が製作した刀の押型集である。

(4) 「相州周広を尋ねて」飯島忠雄著(刀剣趣味・昭和34年12月号)による。

(参考図書)

新刀古刀大観

新版日本刀講座

日本刀工辞典

日本刀の控と特徴

藤沢市史

長後誌史

鎌倉時代の交通

武士団と村落

神奈川県大観(鎌倉三浦湘南)